



序

吾輩を吐月亭の松陰
也門人、其を味とぞんて
か、そのまゝ、其の字を摸寫
して、文字を去り、其の跡
深痛を所命とす、のひ、再

ふれと校正して予は序を
求む嗚呼芭蕉をくみ十
年まことを我なりせむ八子
此法第一様のふま破り
予ぬ

一熱如處

序

予は昔月れあつたに序を
おきれる、沙門とて、
かゝる言を、月然とて、
漸神を、乃きよし、
と推し、是や、江府に、
今もて、とや、
よし、此を、

お遠おがはらとあま紙のりてその
まねと同かやそ扱さるるよは
二十分他と類しおのく物珍あり
白丸其角先生の解風とては
んがよ同さる申しと多し
後には晋子に流風多く東朝より
又多く東朝より破るおひらみと
らるよ女籠くはる又二十人
に作者は

一
うち年々そのゆか田交の人こが
かへいって女籠と備えんやか
ゆきも又そのゆか田交のりて
それと坐すゆか田交のりて
かへいってゆか田交のりて
ゆか田交のりてゆか田交のりて
書とちられてあやれ一冊あ
ゆか田交のりてゆか田交のりて

湖盤和存平采祇買秋
十谷推義佐砂仲丞明風

此歌仙作者

樓者木旨和紀再石蠟馬
川北髮原專逸賀腸名郭

る苗あり及夜まありとて
とよしつらりあねまとい
うらむらひて人はちく
あまのついで

巻左

空曆え末のう

連中同世に教仙の序は延寶に二十
教仙を芭蕉翁の母あり世に教仙
延寶にその母ありて教文その實を
始ありしれは俳諧に變化を時れ是は
流形にその母ありし傳をその母ありし
なりしは教仙の母ありしと云はれ延寶
に二十教仙を芭蕉翁の母ありし傳を
今世にありしと云はれ其母ありし

むつらふとて部集とていふへと
うしとて世にその母ありしと云はれ

芭蕉翁の母ありしと云はれ延寶に
室の御風いふとて後林風室中を
芭蕉翁の母ありしと云はれ延寶に
貞享子申子の母ありしと云はれ延寶に
後林風の母ありしと云はれ延寶に

ひかりと多懸執集噴地集一
白凡と云ひくとき未う精義集よ
おめて漸染悟定りぬ世序ハ六の
人々の祀とすう其ら用え生慈恵の
慈恵を信て一教とほくぬくの文り
序并系さくくの句と外に傳もあり
うそ傳よそとこと色慈恵の教も
定らんと申るは建しを境は其角は下

まありれし今ありよ及んたうと
世歴くの宗色を延宝れ二十奇化
と今世の佛道の好は用らうと
深き云々延のりや志く次

延宝二十奇化

奈齋馬以等の是は後れを
神代のむうし縁舟篋
血うあてかく紅針は尻の好

猿のやうなまはしりから

又

夕月の赤い紙を目と建

是にあの世れ物此の責り

又

猫の急ゆうまといまひり

抱無を人序と由て後風を待

之和史室大の世れこそ無と用え

丁まやうは後林見とすまが結くま角流

いぬうこおらあまは史室史室のよま

た款他の對あれえらねらひまの

よやまの又かめあまの思まを

半ばうぐ代への物選とちち人の

編る継集をま序者とあつて撰者

心を合と調をれを今赤式よを

古老も死うせ遍る所の時

俳風をいふも他のよからん次は
遠後といふも花の血脈を傳て
左風とちよくても多し一統は東
流の水と也波川人は其角気
とけりし書札より水とよりか
集編といはれんすよくと
ふ事あり

又同世集廿四巻よ 存義

おとこは次故喉も又かこも

又才拾巻り 秋風

て後より二林格や難波格

又才十二巻よ 渭北

百ちその稲負背も海子も

是等集一巻のち若かりし
半よや後子れし女はるゆ

答ふれど此集一部と云ふは平人が
編みあれたるものなりと云ふ去りし
此集編む時より奇絶と云ふて
後多合の比喩なりと云ふ
前後と採合せ正改と云ふ事
後と採合せ正改と云ふ事
後と採合せ正改と云ふ事
後と採合せ正改と云ふ事

附あり是ホと見らるる
一巻に柏子と云ふ
物の名之所も
ありと云ふの柏子あり
涼蒼々と文格よ

續中られ少所已よ

音と色竹より

是柏子ありと

よゝあゝ此三ッ巴三ッそのよゝを折竹と
紋を以て拍子よゝまゝくまゝも焼わら屋
のよゝを中つ度又ゝを字の格をよゝ
とあり

昆蟲よ拍子と付てこ波
こ波や名れ花ちる星月夜

是等ハ詩格也又近且赤毛屋風介
抄をよと續て其門もみせりよ好る

人あり此句れ流といひ

遊の梅り書とあゝ先く

書れ拍子無の鉄屋にありりり
此句を右あとりこは流あきてい上流川の
半拍やまゝ多し今れ之門よのよゝを
よゝ及ん又雑踏の連音と指つくり
いゝんを流をうゝいゝ喘かていゝかの格
よゝれやよゝみりり女流よのいゝりぬ

このあり能くははるけきといふ
半ありてははるけきといふ
何と云ふと云ふや是一句をうり
何と云ふと云ふや是一句をうり
何と云ふと云ふや是一句をうり
何と云ふと云ふや是一句をうり
何と云ふと云ふや是一句をうり
何と云ふと云ふや是一句をうり
何と云ふと云ふや是一句をうり
何と云ふと云ふや是一句をうり
何と云ふと云ふや是一句をうり
何と云ふと云ふや是一句をうり

之のあり能くははるけきといふ
半ありてははるけきといふ
何と云ふと云ふや是一句をうり
何と云ふと云ふや是一句をうり
何と云ふと云ふや是一句をうり
何と云ふと云ふや是一句をうり
何と云ふと云ふや是一句をうり
何と云ふと云ふや是一句をうり
何と云ふと云ふや是一句をうり
何と云ふと云ふや是一句をうり
何と云ふと云ふや是一句をうり

十五解

其人 其場 時分 時節 離附

透附 迎附 白附 心附 理附
景情 雲附 聲 寂 撓

右蕉蘇より筑音因竹吏登
菱をこつて其角停笑原松傳

七名

起情 白附 柏子 色立 有心
會叙 逢附

八體

其人 其場 時分 時節 天想
觀想 西影 時直

右東其坊其撰

志く是等の細心の事引して一段より
よりの如くへん

右十又賦を從句を尾をてり此是右の
附合よあてりんり時二十分他のうち
又之を亦たして其の運の運ひよ計り

雨ふ一書と一句とこと終るいふ
とれあれそそと驚くし物事のまじ
のひと何あれと一巻のころ一二ヶ所は
附きていんせと事お慮るれいと初縁と
れとあしとらもあしとくあとの業あり
お祈りさと又人あつて踏破せと是も
能物行ありは又書角尻をたむつ
の言是ありと門業よ初祈りして

他門のうらと除へるとあつたや

才一巻

湖十

栞折んかのまも物くは後
袖ひひりい書やうれ末
本名れは是所のいさの書りて

とけとつ物うらこの句と事お慮るれいと
もいさとあしとらもあしとくあとの業あり

あつらふとて詠ふ一採録をて集む
して又辨れ流句なり

赤流 對附 透附を附 頃る

是と流とて一採録の流くた人勝と
志厚くもてり句多し波蕪翁の冬風と
いふ集と服より一採録と流く流く
紅句れ辨悟と流て一句は作意を流

何と才とすたると世句ふ

栞をきここのまも袖く日影が

袖子のうりれは舞の公ま

流れ雪乃ちりかる地

ちりれ句を大宮人の辨れうて舞
望人好如人し後章を流栞のうし出
しる場と書れ黄からを栞折の転ひと
流文の君後の月ありやうよ脱もい

引きぬけある一世二句のよれよを
あねと一向僧尼といひて居るは

神のあひかり書やりれ末
大名の足跡れ小き物りて

才とを一物の場よりそ又の法なり
杉形太山あとりつるありはきとを
親子よ舞字くよお伴もいふ言絶の
所合を降りひりかたは味うらと

中とす世才と此一句旭は終ありら馬に
寄ひあり茶臼を初らあひかりおら
村るれ海と此句と足降らよや世
いあひうるとま終おめて才と此句と
あはあ句の書やりの末と足原一
寺より去山莊あつてん

高様よ福山はまを配らせて
ともをへら世中いりてん

大名は芝居のよ

馬ぞえまをいふは比

一般と二般と海濱のま

日向目より目又あやうき場と今日向目
を軽くともうするをいとましく人
多しあせしよ軽くすうよあつた
一向の位をやうよあひあう此馬乃
日向目第一あうあうあうあう

雲やうれ糸をき合くあうあうま
夕暮るところんるへまはあ一向も
日向目よああああああああああ
大名は芝居のよ
後よとまらうあう

此句よあうあうあうあうあうあう
あうあうあうあうあうあうあう
あうあうあうあうあうあうあう
あうあうあうあうあうあうあう
あうあうあうあうあうあうあう

中をきき多しと古人のやうなうらも
かきしり下よふ別者人さううも
こも嬉しこも嬉し多し

九句目

鳥次んまそふ

一彼と一彼と流し滞りたれ

是れ今日の御儀は多し若し人々知り
所のこし命しうら然し旅中のふれ

あり船中をさうな後し舟を旅も
旅のこし向のまふひつと馬も多し
こし場の用は多しつと馬も多し
御古れ方(さ)おりてこ馬の向り
九句目附ケん

鳥次んまそふ
若細れ致くこし麻也

こし向(さ)う馬とんれを林と籠ひ

しるを降さうすこよ雲れ峰のこ
降てそよくこよのよ麻さうりこ足付
を頭さる中れあいらひこかくひらひ
那破さんこよの神とけ一巻の巻頭
よそ別て瀬深あまを表さうりこ
こふ白うあこと分て中せ是より巻く
のこち目さのあぐ中たしえけ巻
巻一の巻白を

御程れ古ひよ冬と訪まらう

名もいらくよ下れら張

古きまごち巻峰の巻れ女

今や左巻巻としくも京土坂後府赤の
御城ありころい初土巻をうし
土坂を西ふを押二條ハ白と都と巻
しちり後府をうして武江よし
いふよ巻巻の巻巻を巻ここと巻巻あり

白とあすや連ぶ御階もよ道と
すりあたるのそれくよよそくこと
一君とて禪師佛の如後も歌ん
ところ方へは是らものれは感徳あり
時を山所らぬと答へくはちく音角
夕之の吟は雲と起すあふくたさ道
あるとや今世あひまうこの歌は嬉配
尾は池の白うて若親子は牛付舞よ

あつまうささくぬ人あつて同といふ
暮ふへいや解よあふ白よさ差即とも
所はとらはなぬすの秋とあつこも
ちりしむいへは蒸のぬを門人
杉風う舞のいそれとあふふ一々
法身といふ白とはりたとそはおと
凡物に伝といふへはれい外古人
志や一も建しり林白もねとあつた

たゞて蘭をとりて得るはたはれと
田舎のこゝろは地味もこそ一色にうつて
例に昔書うことよの遠きよもゆる
麦鳥糞を涼しむるや

うい蘭白の細く又湯

は不火役とも麻ともすはれもあつた
うい用のういれきよといはう
及とい今ううく附白はたはれと

中これ一明所の念をよとてなす

御後れ古ひよとてはれり

若しううく以下のうは

若し白の附人となすは明はれ
かきうらわのあつて旅人と見て

玉味も別中か風物

能地路の糖みは甘る路れは味も
面被るは却人のあつてううく

けりよはげしきふらあゝ孫と昔業かこ
よいぬきかたしとよし

中二 盤谷

的軍よはひ今も陸台

よふれは華ふも孫あ昔業を

此後お坊のまのあまふたれうれい陸の
的軍よはひ今も陸台よ場はあ

らひまひいりてはたふらよこ何と陸の
そふもやそしむとよふこりそ終ら
うもやまのあまふたれうれい陸の
いふよもたふらよふらうらよふれ
てふまふを芽出しよふらうらまふ
らとよふれうらよふらうら

孤うらむ血れかたふらま

そふらふらうらふらま

角子にいのちをよき書けり

先世のよき事と申すは年長家女房
娘様かゝりの親と意と定むるは
足るにせし意も限りなく女房
娘きとも傾城地所とも人偏の
うへのあつらひも心よきもの
者一し故家一とて時とる一
ふれともそのよき事とて附のよき事と

つとめつらうとて柳花を人或は

よや七の後の意と定むるもの

こゝろもよき事とて法を

けちのよき事と申すは年長家女房
娘様かゝりの親と意と定むるは
足るにせし意も限りなく女房
娘きとも傾城地所とも人偏の
うへのあつらひも心よきもの
者一し故家一とて時とる一
ふれともそのよき事とて附のよき事と

所はまゝあるは角字のいひのなほ
あつらふもあつらふは誰か
よきあつらふ心の中よきあつらふ
是等もあつらふ時節よきあつらふ
場ありをよき

屋うね半一臥ちり書

二つと一ひの續くぬ小の月

お終るぬあつらひの光

初の時を時分からはは誰かの小をよ
ひあつらひ後の時分よきあつらひ
よきあつらひの干をよきあつらひ
よきあつらひの干をよきあつらひ
よきあつらひの干をよきあつらひ
よきあつらひの干をよきあつらひ

大名と向ひ合ふる花さう

楓も若くはあつらひ

此二孝のあつらひのあつらひと眼の
あつらひといふ詞をよきあつらひ

曲原よせしきりりとるくうりて用の
半あり是を辨別致る迄其木の
時う又を冬れ後白照をまへくはし
杖のなとて其よ塚かいらせまの
首尾と測り用あり程に傳あり其受
此揚りよ楓もまくとあり他門を
あつて其まのま若楓其まの楓の
芽をまへあり

才三

和推

出雲や柿乃若れまところ

まよよまの果ぬま

能く見あたる一はま附ぬ根し
若といふ字も附るとえりてまの
まをまうまへしつれうりまの
揃えまのまといふまのまとして

深て昔より神乃其友

かく附て書面よ急といたりあれは信業
中の君あふ山も世より古き宗の記れ中
及よ舞定て親父の遠くは来る
別れ泪る怪なり

雲乃其より起る末の子

覺てて自由の起る多し

是等より一巻の附承て覺る山花

寺院あとのより一巻の附承て覺る山花
例の芳名中村の付とも

鬼より始りて神も

かく附てその父は世に常氣にせ
中より神志ありて安今と
世より起る

才也

存義

根吼る遠山乃月

松茸の道にこそおれ松茸

是等松茸へと半は足踏合い斗は
糸ももつた一斗は松茸の男根
よ惚れをきかるとあるとあるは
片一とあるれと又一斗たを
いふ俳句あるとあるとあるは
新みしうあるとあるやむとあるは
碓氷の吟は近世が評は各息一と

かやめり又老は載つては松茸
しうとあるを深くとあるは
色はと世路の志ありとあるは
鳥者どのも有とあるは松茸より俳
俳句を幸取持の之故と思つて待た
連歌のたよりとあるは松茸門は
正法れあるとあるは松茸松茸
遠くは月といふとあるは松茸

まふしと紙を米なくたさうゆく
くはらうと高くと身が何れも
及び其意の毎に路も高くと
お備と高くと高くと高くと
尾しこれと此年秋の備の用を

粒 呪 造 山 の 月

たよつと元と冬と隣り
か 治道ともお定れ里の荒く粒を

文がり粒れ移ると吹来して腸とら
らら(と)けし又名粒のうと山より

下 孫 世 一 一 持 取 古 意 印

今いともいへりれ美

其との孫を言を孫おつ

ふれや白ひれを海ぶらひをて
より丸のよつと高くと高くと止る
たむく高くと引あけていされ

阿婆と皆を月よのせ辰金世ふらの
えののそつり兼て新しと物よ持
ふらふらふーしこれそを海よせぬ
下はまをさーわーせうふりーよ
えののふと引あぢうらーしえんまよと
ふくうら場ふいそ流人もおれして
あつこまよ真とあをぬおつとこ夜後
はらうひーうらぬし染付一白附る倒し

一向のあひーらとと好てあを中とらや
やうらゆ初の時ー下祿屋の古馬帽子
えののそつりあのふらうやこれとそ物
まをまが附ひそをうけ

下祿屋し可い物ぬ古徳也
朝のあつりあを辰の正月
あをとあつりあをまよとあを初朝
かく附まそふらののたあを初ーとまよ日の

神事とありて旧部の義武城の
丁度もいふくく句月八を採らる
ふくく句月八の旭れくくく
摘くく句月八の旭れくくく
をれえんくくくくくくく
えりれ句月八の旭れくくく

才五

有佐

是より卯の卯の句月八の旭れくくく

才六

平砂

総物を洲の句月八の旭れくくく

角力くくく句月八の旭れくくく

歌の志まきくく句月八の旭れくくく

此大角力くくく句月八の旭れくくく
角力くくく句月八の旭れくくく
くくく句月八の旭れくくく
是を堪忍くくく句月八の旭れくくく

根之が太ぬと云ふ所らうすそ角カガ
かゝれを結らふもや為白よと海も
るるに

徳の依表の門て押る

せそかくも所らうひさそそ是弱乃
とまれぬる群集の中と彼角カガ
何れも押分て海へは能れとそり
やうらう後と所らうを傷ぬと叙

あはれ

才七

兼仲

いぬ行れと急ぐ一や愛風巻

かきうられ子と遠き白

ねがひつさいうるあをとあはれん

世に言ふれ七十二後と後やうま

凡流未だもあ一いふよ又字を愛る

これあれそそ句といふはけり

かやうなりの子と這入るこゝろにて様よ
如事なる事ありしをさるる白く階
を交へて一歩行の術をゆくは端端
此も這入るへ事れと又も理居るく
家ふるをわくこゝろも物ふしやこ
又下ゆこたしるくこゝろ後もはこ

いふ所のあはるくしや夏の暮
雲吹らるる園れおを發

里下りれ娘よ這入と吐きせて
かくあしれを雲吹らるる夕之風乃
は清らひもよしし一歩行よ外を發の
生垣又あるし一歩こゝろ這入るは
して御所の義式ゆよおおと文好ん

才八 祇承
鳥籠の鳥れ中け牡丹
と子れ迷し新出れ女

此後句に一部の考逸びる下りさひを
其能くわたりていふ事ありんか多し
いと殊しことと申の中れといひさうて
かの夫婦とんせしうにありをねたれと
えくより志く教よ此の事いふ句
雲泥の遠ひし上よれ建しといふ
七よ字ありは用なりかの其をちよ
ちるより思ひあはらうや

よ葉をよふ御所の地垣

かくしつらう流るふもよめ葉のあ
らひりうきるの新成所とい遠ふ
此の若れ白うらうはし中
いし

廿九

賞明

とれきも五月に成つさう

此の事ありし存義も

了無のそ涼言を無名は

上の句ははらうささるあり
仰傳ふくてたあやちるし
げ二句あつた堂のり句をそ風堂
さつさるあつたり又涼言を
ら涼とそ無名とちるなり
か一はらうささるさ
おありさつらあつるよ

又

目れをそ涼も水車さ

あつて氣の涼とちるけ

狗の飛のちるくとえ

何れも涼はらうさつた狗の飛を
梅の伝ふちるとちるけのちる
そ涼のりやそ涼又涼とちる
そ涼のりやそ涼とちるけ

鞠子の着るもふて能く存の栴荻葉
此のうらもあひあくること

猿木の集ふ時を思ひ

さもしうらむよ衣れ掛合のりそ
一句も狛人飛よあきりあくるまは

才十

秋風

猿よりあきりまそ附壺にほるあきり
あはるまそあきり

才十

樓川

川舟めくそさし舟は縁

体えあは喧嘩あは又喧嘩

弓矢八情山乃百姓

此所白燕の才一編あきりこころ一尾城の
名流川のあきの中よ

橋向を辰北朝より名流と

大地よあきあけて破る水

け句と支考難して曰大地はひら
はひて二流句の捲回れくくはと
そこひねくくをまえちと終く
して其傷の病一らひとふこれ
並門のまされのこもて八體の備
あり此穠川くちるえん人とも
そあ句の病嘆れ情とそひねらの
百姓と終らうくくは是亦めらう

終く此流あくくは備よ及を
そや成流とそらく一集の執るれ
詞と句とのみ遠と中や回く人あは

採くじしと名書女

かくて二流句の見世は難折書女
の中そ小利く知えの病嘆
大坂の文人男も見知らゆ
まのくも調子あは

才十二

渭北

人ひきり居て居れ水鏡

昔果てたる子孫荷あ髪

此の才二十奇仙の不出事こそは
衆ののちとくさうさうさう
すのめれとくさうさうさう
とくさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう

才一此の才とくさうさうさう
さうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう

從横さうさうさうさう

偏田然居の才從さうさう

才十三

木髪

晴時さうさうさうさう

此の才切字さうさうさう

の類を切字といふ名同よらう
り直して切字れ及現を去る
好ま此らひの句ありされを人
の詞といろは四十七字なり切字
はく後といふるありとを能考
へるも切字なりぬ候も
他者の書ひくしてきらまら切字を
りるの字れこれぬと切字も未練

ある作者をへる切字より
此らひを創て深極あれと悟
りて

見つけせも是れは切字なり
是れの上れ句になりなり切字
此ら現を能考しあり切字を
りてなりとてなり

青原

六ツセツ下の冑と後ひし

死もさよと後と押して

帷子れ曉をくよりまらり

けこののつたり我門の御者よも時を
半し能くぞふ下一歩の後ひ
出らるより帷子れ一歩となり
け御者も曉とさよりとひあふり

帷子れよれりりり及令探れ
たうくかきあはる他人の安
夜を時らうと備えたり

あつたれと夜はさるる

四阿をよる吹入る山あり

ちのちの二句よ御中よも久き
定りしれえと句目を死女の田
一發も身よ志らふと女の粧ひ

次を以て旅中のゆゑをこれ一冊に
なすこと一冊の一字と比ぶるべし

才十五 和亭

是も特凡し御もとのこ

才十六 紀逸

風ひらぬ人のりや細代也

此のうらみとて後白子なる風ひらぬ
人のりや寔念佛持とて其無外

とて如くこれ月夜花時多に之を
口時の後よの世も凡そ
傳りてまゐるを眠く其のぬい
秋のふをあること
そのあはれも漸も時後乃
かこあつて所うそこ格にそれよ
いづちんともなよし紀逸うら
風ひらぬ人のりや細代也

して細代者の風はあといふは縁
此難あり安情の端を東を坊
ふとの路集ふ事とありねれ
今又いふ事しきと御勤く
うらぬの端と鏡台とを
おのれを酒よきとや細代者
今おし年あつてし
ふと来といふ事とを
おのれ

家笠よ月夜をく
貞無引い冬の数山
持するもの

いし
又

月の指よ
柞月真を
い

何の志も。と新羅白子月と花と
結ひ持ちたる。何の深明やと。いふ
そらりある。信じて。新羅白子月と花と
何のひらり。自慢なり。や面白か
ぬ。うらり

葱と根よ。他い水際

編遠ひ。素人。今。何く。言は

け。白夢。何の。何と。編遠ひ。素人

か。申。し。さ。う。合。志。ゆ。は。思。ふ。よ。是。に。南。風
の。二。つ。紋。之。つ。紋。加。か。る。紋。の。新。た。り。ね。と
左。風。よ。て。や。わ。ら。し。と。い。ふ。も。や。こ。が
心。の。媚。よ。お。の。ひ。く。と。く。離。信。の。高。か。と
あ。の。志。も。紋。取。の。白。も。夢。に。は。け。を
見。る。よ。是。に。何。各。く。も。分。別。を。と
申。さ。り。煮。心。の。何。信。の。峰。ま。て。お。し。り
を。し。く。え。又。林。無。く。何。り。て。と。し。く。た。た。と

けりらるゝと総存の祈へて悔遠の
祈る人よめりやま—こが悔遠と
素くかひく思ふとも又いつか
の時わつてかかろ紋のいをもちん
せわくも急げのいやんは是は
きつていふふいふかたは
からてけ—もこけ—ち—ち—ち—
此方仙舟とともは根々々

一牛もせらぬかうさ—
あまこ—にやあつちゆるのし
能く思ひたうは終末と
皆亡人し—牛—
いと閑ゆ。

跋

予一神名竹園名中
居之昔人亦杖之とら
ら終一物うう門蓋何某
東邦此二十方位といふ

一集と推乃年々脚子
之書同と家一推此
明合紙と一と終
一帖とありぬとらふ家
門の字とと何と世此
親例と吹とんこれ事是也

吾風之如心ん

南総

吐月

